
MISSING YOU

地球の星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MISSING YOU

【ノード】

N4532F

【作者名】

地球の星

【あらすじ】

聖司が中学を卒業後、イタリアに行ってから1年がたった。高校1年の零は、最近聖司から連絡が来ないことを気にしながら過ごしていた。ある日、地球屋に行くと、西老人が聖司の近況について話してくれた。それを聞いて、彼女の心は…。（旅）長過ぎる人生の道の中で、収録の同タイトル作品のノベライズです。）

中学を卒業してから1年後、1996年3月のある休日、高校2年生に進級を控えた月島零と原田夕子の2人は、自分達の通つてゐる高校の野球部の紅白戦を見にやつてきた。

零は特に試合を見たかったわけではなかつたが、杉村担当の夕子に誘われる形でやつてきていた。

杉村は高校の野球部に入つてから、これまでベンチ入りはしたことはあるものの、公式戦にはまだ出場したことはなかつた。そのため、何とかこの紅白戦でアピールしようと気合を入れながら試合にのぞんでいた。

しかし後攻の白組にいる彼は、今日もベンチ入りはしたが、出番がないままだつた。

試合は5対0で先攻の紅組がリードしたまま、8回裏になつた。先頭バッターが三振で倒れた後、監督は今日ここまでノーヒットの9番バッターに代えて、代打に杉村を送り込んできた。

勢いよくバットを振りながら左バッター・ポックスに向かう彼の後ろ姿を見て、夕子は表情を変え、「杉村ーーー！」と、大きな声で叫んだ。

その声が届いたのだろう。彼は一瞬こちらを向き、軽くうなづくと、気合を入れながらバッター・ポックスに向かつていった。

すっかり杉村の応援モードに入つてゐる夕子の隣で、零は表情一つ変えずに試合を見ていた。

「夕子、周りのみんながこつち見てるよ。」「えつ？」

夕子ははつとし、思わず顔を赤らめながら辺りを見回した。

「冗談よ、冗談。」

「んもう……雲つたら…」

雲がからかってきたことに、タ子は思わず頭に血を上らせた。そのため、今度は違う意味で顔が赤くなつた。

「それより、そろそろピッチャー投げるよ。」

「えつ？あ、うん。」

「ほらほら、杉村の応援は？」

「す…、杉村——！」

タ子はすっかり雲のペースに巻き込まれながら、応援を始めた。

杉村は1球目からフルスイングをしていったが、緊張のせいか2回続けてストレートを空振りし、たちまち追い込まれてしまつた。一方のピッチャーは疲れてきてしまつたものの、ここまで白組を一人で〇点に押さえていることで、すっかり自分のペースで投げ続けている状況だつた。

杉村は（このままではまずい。むざむざと三振なんか出来ない。）と思つと、すかさず打席をはずし、

「ちょっとタイムお願ひします。」

と、審判に告げた。

タイムがかかっている間、彼は背後で声援を送つてゐるタ子を見ようともせずに、必死に自分と闘つていた。

（何とかして打つてやる。まだ1年とはいえ、紅白戦の控え要因なんかでいてたまるか！）

そう考へながら気持ちを立て直すと、再びバッターボックスに戻つた。

3球目は高めのつり球を見逃し、4球目は低めに落ちるカーブをファールにした。

杉村は鬼のような形相をしながら一切の雑念を振り払い、完全に勝負の世界に入り込んでいた。もはやタ子の声も、全く耳には届いていなかつた。

5球目、6球目は低めのボール球を見逃し、これでカウントは2

3になつた。

5点をリードしている白組のレギュラー陣にはあきらめムードが漂う中、杉村はこの1打席にかけようと必死だった。

その後、彼は7球目から4球連続で、ストレートをファールにして粘つた。

まわりの人達は、零とタ子を含めて誰もがその手に汗握る展開に釘付けになつっていた。

次はどうとう11球目となつた。
ここまでテンポ良く投げてきた相手ピッチャーは、その粘りに押されたのだろうか、段々肩で息をするようになつてきた。
いつまでこんな勝負が続くのだろうか。
もしかしたらずつとファールで粘り続けるかもしれない。この勝負を終わらせるには、ボールを投げて歩かせるしかないかもしれない。

ピッチャーは心中でそう考えていた。

その頃、タ子はいつの間にか声を出すのをやめ、両手を合わせながら「お願い、打つて！」と言いたげな格好をしていた。
そして11球目、ピッチャーは早く三振しようとわんぱくに、こん身のストレートを投げてきた。

杉村はそれにフルスイングで応えた。

ガキーン！

打球はライト方向に飛んでいた。ライトは懸命に打球を追つていつた。

「入れ！入つてくれええ！！」

杉村は走りながら思わず叫んだ。

打球はぐんぐん伸び、ジャンプしたライトのグラブのわずかに上を通過してフェンスを越えていった。

「入つた…。入つた――――！」

タ子は思わず立ち上がり、ぎゅっと合わせていた両手を上に突き上げて大喜びをはじめた。

雲も「すーーいーー！」と言いながら一緒に喜んでいた。

緊張感から解放された杉村は左手を突き上げ、雄叫びを上げながらダイヤモンドを一周して、夕子を見ながらホームインした。

一方で、ホームランを打たれたピッチャーは、まだ4点のリードがあるにもかかわらず、あまりにも嫌な形で一発を浴びたことに憤慨していた。

その様子を見て、紅組の監督がグラウンドに姿を現した。そして審判にピッチャー交代を告げた。

その後、白組はリリーフピッチャーの前に押さえられ、この回は1点止まりだつた。

9回表、杉村は活躍が認められ、ベンチからの指示で、ファーストの守備についた。

それを見て、夕子は再び声援を送つた。

杉村はさつきまでは勝負にのめり込んでいたために、夕子を全く無視していたが、今度は彼女の方を向き、左手を振り上げて応えた。試合はその後両チームとも無得点のまま進み、結局5対1で紅組が勝つた。

選手達が集まつて礼をした後、杉村は喜ぶ紅組の選手達を見ながら、さわやかな表情を浮かべていた。

試合終了後、雲と夕子は自転車を取りに、学校の自転車置き場まで来た。

「夕子は杉村と一緒に帰らないの？」

「ううん。さつき杉村のところに行つたら、『負けたチームには、全員特打ちと、グラウンド20周のランニングが待つているから、今日は遅くなる。』って言つていたの。今頃は息を切らしながら走り続けていると思うわ。」

「ふうん、なんだ。夕子って最近杉村と一緒に帰つてないでしょ？」

「うん…。」

「つれない彼氏だよね。本当に野球バカだし。野球しか見えてないのかしら。」

「でも気持ちは分かるわ。今はレギュラーの座をつかもうと必死だから。その分私は会える時間が少ないけれど、我慢しなきゃ。」

「そう…。大変かもしれないけれど、夕子も頑張ってね。」

「そうね。そういえば、天沢君から最近手紙とか来た?」

「…。」

零はそれを聞いて動搖してしまい、うつむきながら首を横に振った。

「あ、ごめん、気にしてることだよね。」

「…うん…。でも、自分で選んだことだから。」

以前より会う機会が少ないとはいって、杉村は夕子と同じ高校に通っていた。

しかし、その一方で聖司はイタリアに行ってしまい、あれから零とはずっと遠くに離れたままだった。

果たして零はどのくらい辛い現実に耐え続けているのだろう…。夕子にとっては、その壁の大きさが果たしてどれくらいのものなのか想像も出来なかつたが、せめて自分が杉村と良好な関係を続けることで、少しでも零の励みになりたいと考えていた。

夕子と別れた零は家には向かわず、西老人のいる地球屋に自転車で向かっていった。

地球屋に到着すると、零はドアをノックした。

すると、中から「零さんかね?」という声が聞こえてきた。西老人の声だった。

「はい。月島零です。入つてもいいですか?」

「もちろんだとも。さあ、入りなさい。」

「では、おじゃまします。」

零は中に入ると、机に腰掛けた。

西老人はお茶を入れて、零に差し出してきた。

「これ、おいしいですね。」

「そうか、よかつた。」

2人は出されたお茶の「ことじばらく」の間、会話を続けていた。
「ところで、雲さんは新しい小説の執筆はどつかね？順調に進んで
いるか？」

「はい。まだまだ完成は先になりますけれど、受験生だった頃と比
べれば、いい形に仕上がつてきていると思います。きっと私の成長
ぶりを感じ取つていただけると思います。」

「そうか、楽しみに待つていますよ。」

「あの…、ところで…。」

さつきまで明るかつた雲の表情が曇つた。

「何かね？」

「聖司は…、聖司はどうしていますか？連絡とか、ありましたか？
実は最近、なかなか返事がないんです。私が3回続けて手紙を出し
たつきり…。」

表情がますます曇つた。

「そうか。」

「あの、おじいさんには連絡をしているんでしょうか？」

「僕も最近音沙汰なしだったから心配していたんだが、昨日の夜、
久しぶりに電話がかかってきてな。」

「えつ？かかってきたんですか？」

「ああ、そうだが。」

「あの、聖司、何て言つてましたか？元気に過いしていられて言つて
いましたか？」

雲は何かにすがるよつとして問い合わせた。

「さすがに悩んでいるような感じはあつたな。」

「悩んでこるつて？」

「つむ…。」

西老人は、昨夜の電話でのやり取りについて詳しく話し始めた。

『聖司、どうしたんだね？ そんなに思いつめて。』

『作れないんだよ！ バイオリンが！ どうすれば自分の納得出来るものが作れるのか分からないんだ！ 先生からも色々言われたし…』

『そんなに興奮することもなかろう。とにかくで零さんには連絡をしているのか？』

『してないよ。こんな状況で出来るわけないだろ！ 零にみつともない姿をさらけ出せるか！ おれは、一人前のバイオリン職人になるつて零と約束したんだ！ こんなところドライブしている場合じゃないんだよ！』

『変なプライドは捨てなさい。そんな意地を張つていては、いつまでたつても一人前にはなれんぞ。』

『じゃあ、どうじゅうつてんだよ！』

西老人は聖司が言つていたことを包み隠さずには話した。

それを聞いて零は動搖を隠せなかつた。

「聖司は、そんな理由で私と連絡を取ろうとしなかつたんですか？」
「多分そうだろ？ あいつの性格だったから言こ出しかねんことだ。」「そんな…。」

零はますます動搖して、椅子に座つたままつづむこしてしまつた。その様子を西老人は見逃さなかつた。

「すまなかつたな。零さんには辛いことだつたかもしれん。」

「いえ、聖司の近況を聞けただけでもよかつたです。」

「そうか。」

それから2人は聖司の話題からは離れ、別のこと話を色々と話し合つていた。

そうしていりつくりに田舎へつと西に傾いてきた。そろそろ帰る時間だ。

「おじいさん、色々とありがとつぱやこました。」

「なあに、困つたことがあつたらいつでも来なさい。」

「はい、分かりました。」

雲は深く頭を下げる振り返り、自転車で家へと向かっていった。

その途中、雲は信号待ちをしていると、西の空で雲のすき間から真っ赤に燃えている夕日が目に入った。

それは去年の3月に、聖司がイタリアに旅立つてしまつ前日に見た光景とそつくりだつた。

真っ赤な夕日、街の建物、まだ芽吹いていない街路樹。全てがあの時とままだつた。

しかし、唯一つだけあの時と違つものがあった。

聖司がいるかいなかつた。

雲は、ふと1年前のあの時のこと思い出した。

『、もうすぐ信号が青になるよ。自転車に乗つて。』

『うん。』

聖司に言われて、雲は椅子に座るよつこして、荷台に乗つた。

『さあ、今から飛ばすからな。しつかりつかまつてろよ！』

『うん。気をつけね。』

雲はそう応えると、両手を伸ばし、背後から聖司をしつかりと抱え込んだ。

そのぬくもりを感じた聖司は思わずドキッとして顔を赤らめた。そのせいで一瞬まわりが見えなくなつてしまつたが、次の瞬間に私は我に戻つた。そしてペダルに思いつきり力をかけ、横断歩道を渡り始めた。

（このまま時間が止まつてくれたらいいのにな……。）

走つてゐる間、彼女はずつとそう考えていた。

あの時感じたぬくもりを、雲は今も覚えていた。

だけど、今はもうその人はいなかつた。

雲が込み上げる寂しさを抑えながら、夕日を見つめていると、信

号は青になつた。

次の瞬間、まわりの人々は一斉に進み始めた。

それにつられてるようにして、零は自転車にまたがり、前に進み始めた。

家に帰つてから、零は真つ先に自分の部屋に行き、早速ラジカセの電源を入れ、カセットテープに収録されている曲を聞き始めた。この曲は去年、聖司がイタリアに行く前に録音したもので、聖司や西老人ら4人が演奏して、零が歌っていた。

聞こえてくるメロディーの中で、バイオリンの音が、曲を一層印象的なものにしていた。

聖司がいた頃は、これらの曲を聞いていて楽しかった。しかし、今では聞いていると寂しさが込み上げてきた。「聖司も…この曲を聞いているのかな?そして、私のことを思つてくれているのかな…?」

零は曲が終わるとテープを巻き戻し、また聞き始めた。そうしていつの間に、狂おしくなるぐらいに聖司のことを考え始めた。

聖司…、いくら物事がうまくいかないからって、意地なんか張らなくてもいいじゃない。

私は一人前のバイオリン作りになつた聖司だけが好きなわけじゃない。

一人前でなくともいい。夢に手が届かなくてもいい。

泣いている聖司でもいい。悔しがっている聖司でもいい。

怒っている聖司でもいい。みつともない聖司でもいい。

私はただ逢いたい…。それだけでいいの。

逢いたいよ…、聖司…。

お願い…、会いにきて…。

雲の目からはとうとう涙が溢れ出してきた。

一泣き出すと、次から次へと涙が溢れ出し、止まらなくなつた。やがて、表情はクシャクシャになり、ついには号泣してしまつた。
「聖司！聖司のバカ！！何で私にこんな辛いおもいさせるのよ！！何で途方もない夢なんか描いたのよ！！私が今どんな気持ちなのか分かっているの？聖司のバカ！バカバカバカ！！！」
彼女がこんなに泣いてしまうのは、あの時以来だった。

1年前のあの日…。

その日は、聖司がいよいよイタリアへと旅立つてしまつた。空港での見送りには、聖司の家族をはじめ、雲、タ子、杉村が來た。

『聖司、父さんはまだお前を認めたわけではないが、自分で決めた道だ。絶対に夢をかなえて来い！約束だぞ！』

『お母さん達は、お前が高校に進学してくれることを諦めたわけではないけれど、夢を大事にしながら頑張りなさいね。』

『はい、分かりました。頑張ってきます。心配しないで下さい。』

聖司は胸を張りながら答えた。

『聖司、何かあつたらいつでも連絡してきなさい。向こうの先生にも失礼のないように。』

『天沢君、成長した姿を楽しみにしているからね。ファイト！』

『おれは…、なかなかいい言葉が浮かばないけれど…、とにかく頑張れよ！』

西老人、タ子、杉村も続いた。

聖司は彼らにも一言ずつ言葉を返した後、雲を見た。しかし、さつきまで明るかつた彼女は、今はうつむいていて、暗い表情に見て取れた。

『おい、雲、どうしたんだよ。おれに何か言つことないのか？』

良く見ると、彼女の手は震えていた。

『雲、お前もしかして泣いてるのか？』

聖司は身をかがめて表情を見ようとした。

その時、黙つたままだつた零が震えるような声でしゃべり始めた。

『聖司…、本当に行つてしまつの…？』

『ああ。今さら何言つてるんだよ。』

『もう…、会えなくなるの…？』

『当たり前だろ。』

『聖司の…バカ…。』

『えつ？』

『聖司のバカ。バカ！バカ！！バカバカバカ！！何で私を一人にするのよ！何でイタリアになんか行つてしまつのよ！ 聖司ーーー！』

零は泣き叫びながら言い放つと聖司の胸元に勢い良く飛び込んできた。

『うわっ…ちよ、ちよつと…』

人前で突然抱きつかれてしまい、聖司は対処に困つてしまつた。

『私を一人にしないでよおおおおおつ…！』

零は聖司の体を力いっぱい抱きしめたまま、号泣し続けていた。

『ごめん…。ごめんな、零。おれのせいでこんな辛い目にあわせて、ごめんな、ごめんな！』

やがて聖司の目にも涙があふれてきた。

2人は案内板に“Final Call”的表示が出るまで、そのままそばに寄り添い続けていた。

零は聖司の姿が見えなくなつた後も泣き続けていた。

『ちょっとあんたねえ、いくら何でも悲しみすぎよ…』

『じいさん、何とかしてくれよ。月島が死にそうだ！』

タ子と杉村からそう言われてもまだ立ち直れない彼女は、2人に抱えられながらやつとの思いで空港を後にしていった。

あれからどれくらい時間がたつたのだろう…。まだ泣いている彼女は窓を開け、身を乗り出した。

空にはたくさんの中の星が姿を現していた。

零は時間を忘れて星空に見入っていた。

そしてふと、いつか理科の時間に習つたことを思い出した。

「考えてみたらこの地球という星と、あの星までの距離つて何十光年、何百光年もあるのよね。キロメートルに直すと、何百兆キロも、何千兆キロも…。」

もしもあの星に向かつて電話をかけたとしたら、返事がかえつてくるまで何十年も、何百年もかかつてしまふ。

でも、日本からイタリアに電話をかけた場合は、自分の声が一瞬で相手に届く。

実際に電話をかければ、相当な電話代になつてしまつたために、親からは1回につき3分以内。月に3回以内と決められていた。

そのため、今はかけたくても受話器に手を伸ばすことは出来なかつた。

しかし、星までの距離と比べれば、聖司は決して遠くにいるわけじゃない。

いつの間にか泣き止んでいた零は、そう考えながら机に座ると、引き出しから自分がこれまで書きためておいた詞が入つているファイルを取り出した。

そして、今の自分の気持ちを一番象徴している作品を取り出して、じっと眺めていた。

タイトル・逢いたいよ…

誰かと笑っているのなら 明るい今までいられた
離れていたあのを忘れることが出来た
でも一旦思い出したら涙あふれて止まらない
どうして苦しめるの？ どうしてなの？

逢いたいよ… 自分ひとりを置いたまま

見知らぬ世界を目指した人に

嫌いになどなるわけがないけれど

今はあなたが許せないよ

夢と愛は 一緒になれないの?

今も脳裏で響いてる あなたが残した言葉
「君が僕をあきらめても 君を思い続ける」と
朝の度に思い出すよ 嘘でないことを信じて
この田を見つめてた その瞳も

逢いたいよ… 今はそれしか浮かばない

神様 いるなら願いを聞いて

嫌いになどなるわけがないけれど

今はあなたが許せないよ

夢と愛は 一緒になれないの?

あなたも思つて いるよね
私以上に私のことを

逢いたいよ… わがままだけどこの気持ち

手紙に託して送つてみます

今でも好きでいてくれるのなら

読んだらきつと返事をして

夢より自分を 今だけは選んで

逢いたいよ… 今はそれしか浮かばない…

「Jの作品を最後まで読み通した零は、ふと最後に書いていた部分を見て、これを早速実践してみることを思いついた。

「聖司、明日この作品を送るからね。もし読んでくれたら、この詞に曲をつけて、カセットに吹き込んで送り返して。たとえ直接会えなくともいい。曲を通じて聖司を感じられるのなら、私はそれでいいの。」

零はそう言いながら自分を奮い立たせると、早速ルーズリーフの紙と鉛筆を取り出し、その作品を書き写し始めた。

聖司はきっと、返事を送り返してくれる。

そして、きっと私に会いにきてくれる。

書いている間、彼女はひたすらそう願い続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4532f/>

MISSING YOU

2010年10月8日13時43分発行